

滋賀県社会教育委員会議

「学校を中心とした地域連携による生涯学習の環境づくりについて」
～「まなぶ いかす つながる」地域づくりの可能性～
＜まとめの骨子＞

I. 全体構成＜全体3章構成。詳細は以下＞

- 第1章 学校を支援するための団体の現状
- 第2章 学校支援と地域活動の推進
- 第3章 学校を中心とした「まなぶ いかす つながる」地域づくりの可能性

II. 章の内容

第1章 学校を支援するための団体の現状

1. 学校から聴取した団体の現状……………【<1>第一次調査(アンケート)参照】

〔(1)自主的に組織した団体の属性等〕

- 自主的に組織した団体は、小学校で盛ん。その中で、1校あたりの団体数は、小学校で平均2.4団体。
- 幼・中では、「積極的に地域に支援を求めている」回答が小学校より多い。
- 5～7年続く「読み聞かせ」等や「登下校立番」が多数。

〔(2)支援や提案の状況〕

- 学校と団体とをつなぐコーディネーターは経費不足で少数。市町職員という場合あり。

〔(3)地域の方と学校との双方向システムを進めるための必要条件〕

- 活動経費、コーディネーター、学校の実情の発信、人材バンクの設置。
良好な人間関係を。

〔(4)双方向システムのメリットと問題点〕

- メリットは「学習・生活内容の充実」「子どもの経験の広がり」「地域での連携の良さ」。
- 問題点は、活動経費の確保、打合せ時間不足、依頼内容の理解不足。互惠性を築く。

＜*なお、「自主的に組織した団体が「ない」とした学校においても、既設の団体からの支援は大半ある状況。＞……………【<(2)-1>第二次調査(アンケート)参照】

- 個人を含む既設の団体による「地域に根ざした学校づくり」は、大半取組があるとした。「ない」としたのは、中学校に多い。
- 『支援で課題がある』では、「コーディネートをする人がいない」「情報が足りない」ため、『支援の必要を感じない』では、「教職員だけで教育活動が十分」「支援で負担が増える」とした。今後、成功・失敗など適切な情報が必要。

2. 特徴的な活動の取組内容……………【<(2)-2>第二次調査(アンケート)参照】

〔(1)団体から聴取した活動の概要〕

- 「読み聞かせグループ」「後援会・協議会」が多数。20人前後が6～10年活動。
- 支援団体の立ち上げは、「自主的」か「要望・要請」が半数ずつ。

〔(2)タイプ別に見た活動の内容等〕

- 「特色ある活動」を行う団体では「イベントの参加」「環境整備・保全」を、「コーディネートをする人が他にいる」団体では、「図書ボランティア」活動が多数。

〔(3)タイプ別に見た学校以外での活動内容等〕

- 「特色ある活動」を行う団体は市町との関わりが大いにある。
「コーディネートする人が他にいる」団体では、関わり率がやや低い。

○「学校への支援」は、「地域への支援」よりも頻度が高い。

〔(4)タイプ別に見た活動の工夫点〕

○学校等の通信やホームページにより、人の交流や活動の工夫が図られた。

〔(5)タイプ別に見た支援活動の取組成果〕

○学校支援の取組は、「役立った」と回答。

「特色ある活動」は「伝統の継承」で、「コーディネートをする人が他にいる」では「学校の諸活動」で成果あり。

〔(6)タイプ別の実践例〕……………【<3>第三次調査(ヒアリング)参照】

ア 大津市立堅田小学校「堅小 おや連！」の取組

〔(ア)団体設立の経緯と取組内容〕

- ①「堅小 おや連！」の願い ②「堅小 おや連！」の経緯
③「堅小 おや連！」の組織 ④活動実績

〔(イ)活動の成果〕

○地域、会員、子ども、学校、保護者に好印象。ネットワークの利用・活用可能。地域とのつながりあり。

〔(ウ)今後の課題〕

○会員増加、参加者の声の把握。自立が必要。

イ 湖西市立石部小学校「学校応援団」の取組

〔(ア)団体設立の経緯と取組内容〕

- ①「学校応援団」の願い ②「学校応援団」の経緯
③「学校応援団」の組織 ④活動実績

〔(イ)活動の成果〕

○地域の子どもと大人とが顔見知りとなり安全・安心体制が確立された。支援の種類と協力の幅の拡大がなされた。

〔(ウ)課題について〕

○「学校は行きづらい」という保護者のために、広報活動や定例会が必要。学校の意識変容、地域連携、学校・家庭・地域活動の充実、まちづくり協議会との協調性。事務局の部屋の確保と鍵管理。啓発。「つなぐ活動」の充実。人材バンク作成。

第2章 学校支援と地域活動の推進

《1. 学校支援の推進》

(1) 互惠性の推進

○学校と地域・支援者とが負担を感じず常に良好な関係が必要。お互いがやって良かったという関係を作りことが大切。

(2) 支援活動における学校側の対応

○学校側のどのような学校づくりをするか地域に伝えることが必要。学校の困っていること、何をして欲しいのかを年間計画を示し伝える。

○学校は、地域の人々、子ども、保護者を「つなぐ」重要な役割。

○地域の人々の支援により、教職員が精神的にも肉体的にも楽になることを伝えていく。

○地域の提案で、良い企画なら受け入れよう。

(3) コーディネーターの存在

○コーディネーターの存在は外部で。コミュニケーションを活発に。

(4) 学校と外部のコーディネーターやボランティア等との意思疎通

○意思疎通をするために連携を密にする工夫が必要。日誌や黒板の利用は効果あり。計画表の準備と共通理解を。振り返りの時間が持てると次回に生きる。

(5) 広報

○広報は、学校・コーディネーター・ボランティアなど各方面から。成功例などを学校通信等で。

(6) 活動スペース(部屋)の確保

○外部のコーディネーターが常時詰め、ボランティアが待機し休憩できる部屋を。

(7) ボランティアの募集と研修

- 気軽な気持ちで「あなたも何かできることをやってみませんか?」。「できる人ができる時に できることを」する。
- 研修の実施を。マンネリ化を防ぎ、力量を高める。
- 誰もが会員。生き甲斐づくりに。

《2. 地域活動の推進》

- (1) 活動の新たな展開
 - 「特色ある活動」をしている団体は、地域での活動に積極的。
 - 学校支援ボランティアの団体は、学校を接点にしてネットワークが広がる。
- (2) 学校はきっかけづくりの中心
 - 学校は、地域活動活性化のきっかけづくりの中心。
- (3) 人間関係づくり
 - 好ましい関係を学校と支援者等で日頃から築いておく。
- (4) 意図的な仕掛け
 - ボランティアのための部屋に地域のボランティア情報の掲示を。

《3. 学校と地域との連携の推進》

- (1) 基盤整備の視点
 - ア 教育委員会の役割
 - コーディネーターの設置と育成を教育委員会がすると効果的。
 - イ 活動経費の調達
 - 活動経費は、自主的に組織した団体と学校や教育委員会とが相互に連携必要。
 - ・既存の組織からの支援を受けること。
 - ・財団法人滋賀県教職員互助会の「学校生き生き活動支援事業」を活用。
 - ・校区内の住民や企業からの支援を募る。
- (2) 組織・計画の視点
 - ア 組織づくり
 - 中学校の教職員の負担が減らない原因は、保護者の「学校任せ」と子どもが「学校に保護者が学校へ来ることを歓迎しない」。
 - 組織の充実とコーディネーター等の配置システム必要。
 - 平素から学校と地域が良好な関係。保護者が負担感を感じないしくみ必要。
 - 学校と地域の結びつきが増えると、声かけなど防犯性アップへ。
 - イ スムーズな運営
 - 次回に向けての活動記録の保存が運営時期を明白に。行事の調整がスムーズに。
 - 評価の実施が、マンネリ化を防ぐ。
 - 立ち上げには牽引者の存在有効。幅広い意見大切。
 - ウ 人材の発掘や確保
 - 広報活動で人材発掘。若い人材の確保を。
 - 各方面から各方面への募集を。大学生はボランティアサークル等の組織有効。
 - コーディネーターの研修会での交流は、口コミ等があり有効。
- (3) 情報共有の視点

地域へは学校支援の広報が有効。学校の経営方針・年間計画、地域の人に何をして欲しいかが基本。

 - ア 学校から他の学校へ発信
 - 他校からの情報少ない。情報を得ると、自校でもやろうとする気運あり。
 - 成功例・失敗例も含め幅広い情報必要。
 - イ 学校から地域へ発信
 - 学校が何に困っており、何を地域の人にしてもらいたいのか。啓発グッズ有効。
 - ウ 双方向の情報
 - 学校は、地域の方に関する情報が不足。地域は、学校は何を学校に協力して欲しいのか、学校で何が不足しているかが不足。
 - 学校も地域も、オープンに交流することが有効。
- (4) まちづくりへの発展の視点
 - 活動内容や名称を変え、地域づくりやまちづくりへ発展するケースあり。
 - 人的ネットワークの活用例あり。

第3章 学校を中心とした「まなぶ いかす つながる」地域づくりの可能性

学校支援活動は、「まなぶ」「いかす」「つながる」を具現化する重要な取組の一つ。

[1. 学校支援活動は「三方よし」の活動]

近江商人の経営理念で、人とのつながりを大切にしてきた「三方よし」の中の「世間よし」という公の心が今に受け継がれている。地域による学校支援活動が、「学校」「支援活動を行う側」「地域社会」に豊かさをもたらす。

(1) 学校側にとって

- 地域住民が、学校の教育に積極的に関わることは、学校の現状を変え、教員が教育活動に専念することが可能に。教員が地域や地域住民の実態の把握を可能に。
- 子どもは、安心・安全な生活が可能。大人との触れ合いや異年齢体験は貴重な体験。

(2) 支援活動を行う側にとって

- 支援活動は、子どもへの学習支援が、生涯学習の成果を発表する場・自己表現の場
- 支援活動は、教職員には地域理解に。支援活動を行う者には、実態把握を自分で確認し理解する機会。

(3) 地域社会にとって

- 学校は地域の多様な人材の集結の場。知識、技術、興味・関心等を出し合い活動の展開が地域づくりへ。

[2. コーディネーターの養成・研修]

- コーディネーターは学校の関係者やボランティア自らが直接行うのではなく両者以外の者があたるのが適切。
- 各校に1名ずつ配置するだけでなく広域的な連携を指向して学校外に配置するという方法も可能。
- コーディネーターに必要な知識・技能
 - ・コーディネートの技法（コミュニケーション能力）
 - ・学校教育の理解
 - ・学校支援ボランティア活動の理解
- 信頼関係は、豊かなコミュニケーションから。

[3. 学校支援活動から地域づくりへ]

(1) 多様な人々との触れあいを通じて充実した教育を提供する視点

- 学校外の人やものを身近に感じることは、子どもの豊かな成長になる。

(2) 大人の生涯学習の場としての視点

- 学校は、地域の大人が学びあい、共に成長できる場。

(3) 学校を中心とした地域づくりの視点

- 学校は、「地域づくりの核」。地域コミュニティが結びつきを深める場。
- 教職員・保護者・地域住民が多様な人との関わりの中で、人間的な成長を遂げる。
- 学びあうプロセスの中で、人々のつながりは深まり、地域の活力は高まる。
- 地域の活性化は、新たな人材を増やす。

→地域全体に好循環